

集まる意味を問いなおす

リアル／リモートの二項対立を超えて



ハイブリッドワーク

集まる

コミュニケーション

テレワーク

非対面

プロジェクトリーダー

辰巳 哲子

主任研究員



概要

働き方改革、それに続くように訪れたコロナ禍はテレワークを促進し、それによって職場の集まり方は大きく変わった。最近では、リアル／リモートの二項対立を超えて「集まる意味」そのものが問われている。組織にとって「集まる」ということは、組織としての実体を確認する場面でもある。本報告書では、集まりの変化が組織や個人に与えた影響について調査からファクトを捉え、ハイブリッドワークを前提とした今後の集まり方を提言する。

問題意識

アフターコロナの働き方について各社で議論が進められている。コロナ下で実施された多くの調査結果からは、テレワークによって個人の生産性が上がり、従業員のウェルビーイングが向上したことが報告されている。一方で、テレワークの弊害として職場の一体感やエンゲージメントの低下を挙げる管理職は多く、その要因は「対面」や「会う」機会の減少であると捉えられている。オフィスでの対面機会を捻出し

ようとしている企業がある一方で、オンラインだろうと、対面だろうと、うまく集まることができている人や組織もある。集まることの問題は、対面かどうかといった手段の問題ではなく、平時にはあまり考えてこなかった、「集まること」の本質をどう捉えるかにあるのではないだろうか。

結論

雑談などの非公式の集まりが減ったことで、組織としての新たな意味や価値を付与し合う、「意味生成の場」としての集まりは減少した。そして、そのことによって職場の一体感やチームワークについての懸念が高まっている。リアル／リモートを問わず、「集まること」の価値について尋ねた項目を分析した結果、4つの価値に集約できることが明らかになった。感情共有・気づき・一体感・自己開示だ。

価値① 感情共有の場

「感情共有の場」とは、他者との感情や本音、つながりを感じることができる場のことだ。ある企業では、「無邪気な自慢大会」と称して、最近のいい仕事について自慢する時間を設けている。自分のストーリーを屈託なく表出できる場をつくるのが大切だ。

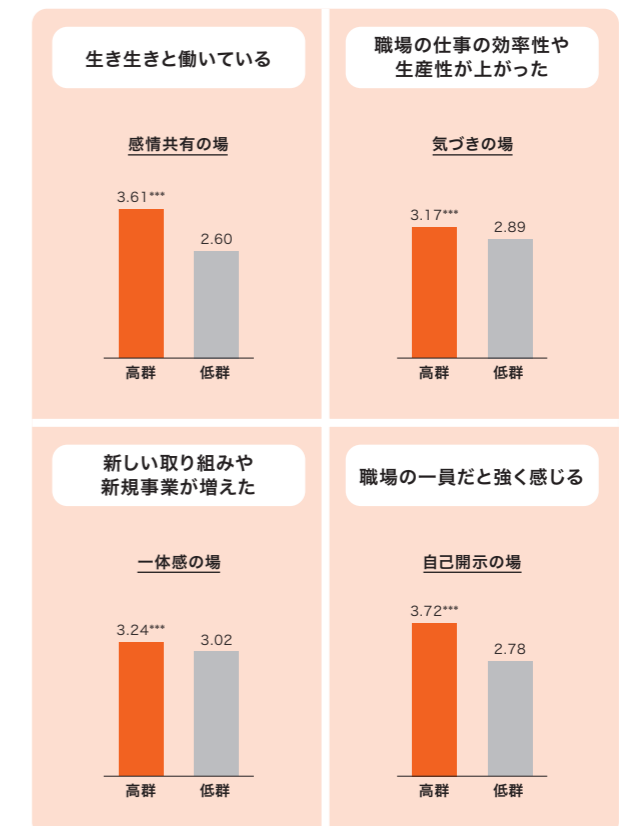
価値② 気づきの場

「気づきの場」とは、仕事の役に立つ情報が得られる集まり、問題解決のための対話の場だ。サイバーエージェントのように、定められたオフィス出社の日を活用し、時間と空間を共にする人から「受け身の学習」が行える環境をつくることだ。大切なのは、多様な人との情報交換の受け皿となる場を構築することである。

価値③ 一体感の場

「一体感の場」とは、自身の意見や行動が求められる場で共通体験をする機会だ。ヤフーではリモート環境下で社員食堂から同じ料理を自宅に宅配し、オンラインランチ会をしている。同じ体験を通じて、互いの人となりを理解しながら組織が大事にしている事柄を共有することができる。

集まる価値とパフォーマンスの関係



注) n=4202を各集まる価値の因子得点別に3群に分け、高群と低群を比較した。
***は統計上有意な差がある。
出所) Works Report 2022『集まる意味を問いなおす』

価値④ 自己開示の場

「自己開示の場」とは、仕事のスタンスや自分の考えや仕事について同僚に意見を聞いてみたりする機会だ。NEC ネットズエスアイでは、若手の考えていることや興味を役員に伝える場『ALL FREE(オールフリー)』がある。「マウント禁止」「お菓子OK」など、自己開示のハードルを下げる工夫が大切だ。

Works Reportはこちら

集まる意味を問いなおす

https://www.works-i.com/research/works-report/2022/gettogether_220720.html

